

教会本部から公刊されている『おふでさき-注釈付き』には中山正善二代真柱の「まえがき」が付されており、冒頭で次のように述べられている。「私は母〔中山たまえ初代真柱夫人〕から、教祖様が参ってきた人々に誰彼の差別なくおふでさきを読めとおすすめになった、という話を聞いた。また、『これさえ読んでおけば、少しも学問はいらないのやで』と、日々母におさとしになったという話も耳にしている。」

と同時に、二代真柱は、当の「おふでさき」に関する解釈を綴った『おふでさき概説』のなかで次のようにも述べている。「再々論じられる事であるが、信仰と学問とは両立しないという言い方は、どうも私には余りはっきりとしない。私の信念を以てするならば、教祖の教をあく迄も貫いて行くのには、それは学問的に行こうと、信念的にこれを論じようと、帰するところは一つであって、その間には何ら矛盾はないと信じている」と述べ、さらに、「結果を求めるよりも、むしろ自分の努力に対する喜びを深めて行く事、これが学問の道であってほしい。同時に、それは信仰の道でもある」と述べている。つまり、「学問」は「信仰」に対立するものではなく、教えを求めて「まなぶ」態度の一つの形態を示しているといえよう。

それでは、冒頭の「学問はいらない」とはどういう意味であろうか。「がくもん」という言葉は「おふでさき」に一箇所だけ登場する。「今までは学問などと言ってはいるが、見えていない事は全く知らないであろう」（4号88）、「この先は見えていないことの万事すべてをだんだんと説いておく」（4号89）と詠われている。学問では先（将来）のことは見えないことが示されている。

また、「おふでさき」第三号から第六号が執筆された明治七年に、教祖は石上神宮の神職たちと次のようなやり取りをしている。教祖は神職たちに直々にお会いになって、親神の守護について詳しく説かれると、神職たちが「その話が本当であるならば、学問は嘘か」と尋ねた。すると、教祖は「学問に無い、古い九億九万六千年間のこと、世界へ教えたい」と仰せられた。つまり、教祖は、学問が「嘘」であって教えが「真」という真偽の区別ではなく、学問で捉えられること／捉えられないことというある種の方法的な区別を用いて、後者を強調されたのである。

したがって、「おふでさき」の言葉でいえば学問で「見えること」と、学問では「見えないこと」があり、「学問はいらない」とは、この教えは学問で「見えること」を伝えたいのではない、という意味に解することができる。そして、二代真柱は、学問で「見えない」ことを求める真摯な態度を「信仰」と呼び、同時に再び「学問」と呼んだのである。

さて、前置きが長くなったが、このような「信仰／学問」的な態度を踏まえると、第三号の続きの歌も理解しやすくなる。すなわち、「この世を創めた神の真実を説いて聞かせる、嘘と思うな」（三号68）、「今までも心学道話や古記（古くからの言い伝えや書き伝え）はあるけれど、元を知っている者はない」（三号69）、「それもそのはずで泥海中の道中は知っている者はないはずである」（三号70）、「これまではこの世創めて以来誰も知らなかった事をだんだんと説いて聞かす」（三号71）、「何

もかも今までにない事ばかり説くけれども、これに間違った事はない」（三号72）と詠われている。

近代以降に制度化された「学問」（アカデミズム）と、当時の「学問」は同じではなく、また、必ずしも神職たちが述べた「学問」と「おふでさき」の中の「心学」や「古記」が同じというわけではないが、しかし大まかには、すべて「見えること」を問題にする「学問」と解して差し支えないであろう。そして、教祖の強調点は「学問に無い、古い九億九万六千年間のこと」であり、「泥海中の道中」であり、「この世創めて以来誰も知らなかった事」である。学問的な言説が「真実」であると「信じている」人間にとって「学問で見えないこと」は「嘘」に「見える」が、「おふでさき」は「これに間違った事はない」と強調している。

「おふでさき」の注釈には「心学」とは「当時人々に喧伝せられた心学道話を指す」と説明しており、「心学道話」とは江戸時代中期に登場した石田梅岩（1686-1744）を祖とする石門心学の流れを組み、彼の弟子の手島堵庵（1718-1786）のさらに弟子である中沢道二（1725-1803）の頃に心学の教化手段として用いられ、庶民が日常の現実に処していくための心構えを平易な口調で説いている。例えば、歴史学者の宮本又次は後期心学の倫理的な教えを次のように要約している。

第一、「孝」の一字を忘れてはならぬ。勤儉、節約、衛生、酒食、共に節制して、度を過ぎぬ事。気儘乃無理の言行を禁止する事。家業への勤勉、不足を訴へぬ事。堪忍、過ちを直ちに改める事。忠恕の心、祖先の功勞を忘却せず、親戚故旧に対する親み、神仏に対する信心。

第二、正直なるべき事。上を敬い下を憐む。国法の厳守。柔和、口論争闘の禁止、約束に違ふてはならぬ。他の恩義を忘れぬ様にする。他の過失を挙げぬ様にする。

第三、世界に我物と名づくるものなし。家は先祖より伝はりて子孫に譲るべき物なり。金銀は我一人の有に非ず。金銀は社会一般の共有物なれば自己一身のためのみに費さず、小にしては一家のため、大にしては公益のために費すべし。商売は金銀をまうけることのみを目的としてはならぬ。常に家族の幸福を考へねばならぬ。

このように心学道話は、儉約の態度で家業に励み、祖先の功勞や神仏への信心も忘れず、正直であり、他の恩義を忘れず他の過失を挙げず、世界にあるすべての物は自分の物ではなく、常に公益に尽くし、家族の幸福のために商売する、そのような人を理想像として掲げており、現代の日本社会にもあるべき姿として受け入れられるほど「立派」に見える。しかし、繰り返すが、「おふでさき」は「このような心学道話や古記はこれまでもあるけれど、元を知っている者はない」と述べて、「元」に根ざした生のあり方を明らかにしようとする。思えば、立教以前の教祖、つまり天保九年の啓示以前の中山みきは一人の女性としての生を営んでいたのであるが、その態度や行いは当時の女性の鑑といえるもので、まさに心学道話の教説に沿った生活を送っていたといえるだろう。したがって、啓示のあとの生き方こそが、「心学」や「学問」では捉えられない「元」に根ざした生のあり方を示しているといえる。